〔短歌〕

七月游想篇

島田修三

時計屋の時計春の夜どれがほんと（久保田万太郎）

噛み合はせ微妙に狂ひふた月を馴れむとをれば春となりにき

がんばるわなんて言うなよ草の花（坪内稔典）

B棟とC棟の間（ま）の二尺より制服少女三たりの出で来つ

夕ぐれの葛飾道の落穂かな（高野素十）

伝馬町露地の羽目にぞ夜鷹もたれちよいと兄さんと言ひにけらずや

逆襲ノ女兵士ヲ狙ヒ撃テ！（西東三鬼）

ありし日のコミンテルンの綱領や高圧線に嘴太鴉（はしぶと）謂集す

研ぎ上げし剃刀にほふ花ぐもり（日野草城）

クレムリン執務室なる暗がりに鉛筆研ぎて愉しみたる人

来てみればほほけちらして猫柳（細見綾子）

しろがねの毛並の珠（たま）をネコヤナギとをにまとへば指先は触る

滅び初む桃より見えし歩兵かな（攝津幸彦）

淋しかりしスメラミイクサ大陸の黄の風のなか蠅率てゆきしか

うごけば、寒い（橋本夢道）

水灌（の）みて三蔵法師の孕みつる妖しき譚（はなし）を読みをり日の暮れ

夏痩せて嫌ひなものは嫌ひなり（三橋鷹女）

「優越人種（ユーバーメンシュ）」なる冗談ありたりきハーポ・マルクスといづれやをかし

香水の香ぞ鉄壁をなせりける（中村草田男）

ラードもて整髪したるゲルマンのお洒落の俺を淋しからしむ

この河／おそろし／あまりやさしく／流れゆき（高柳重信）

剥製にされたる毛（マオ）、金（キム）、イリイーチ笑劇（ファルス）二十世紀幕下りむとす

木にのぼりあざやかあざやかアフリカなど（阿部完市）

舌嚙まば卒爾（そつじ）に死すとおびえたる東映狂ひの小童（ガキ）なりしかな

何となう死（しに）に来た世の惜まるる（夏目漱石）

没りつ日に破れ垣染まりカラス瓜だらりと垂れたる明治の露地はも

苺ジャム男子はこれを食ふ可からず（竹下しづの女）

女議員に頬張られしと自民党首ジリノフスキイも労（いたつ）きをるかな

水のんでおのれ朧となりにけり（角川春樹）

階段をかぞへながらに上りしが踊り場過ぎてイヤになつたる

死ねば野分生きてゐしかば争へり（加藤楸邨）

誅（ころ）されしカメル中将カメル大佐ドヂなるかなや亜拉毘亜（アラビア）の兄弟（えおと）

ひかり野へ君なら蝶に乗れるだろう（折笠美秋）

パトリシア・ニールの夫（つま）にて勇ましき飛行機乗りのダールも果てぬ

巨き船出でゆき蜃気楼となる（山口誓子）

黒潮のたつぷりと濃き沖を航く澪（みを）あざらけき檻襤漁船見ゆ

夏めくや椎のかづきし雲のいろ（高橋潤）

びつしりと青梅むらがる老樹見え城戸印章店の跡地のはつ夏

逃げる逃げる野鴨野鼠妻の時間（金子兜太）

ほろにがきシヨコラ嘗めつつ女房に『嵐が丘』を要約せしむ